

季刊誌

正覚寺便り

いのちに合掌 日蓮宗
法華山

正覚寺

令和8年3月1日

春 第10号

〒409-3865

山梨県中巨摩郡昭和町
西条新田832

電話 (055) 275-3283

FAX (055) 275-3283

Eメール: info@shogakuji.me



法華山 正覚寺

公式サイト

<https://shogakuji.me/>



お寺のお知らせ随時更新中!!



お寺の公式SNS
Instagram



KUNUGI.SHOGAKUJI

正覚寺の日常や行事を
日々更新しています!

春のお彼岸について

住職 功刀 久士

春は、毎年変わらず巡ってくるように、同じ春は二度とありません。卒業や入学、新生活の準備に心を弾ませる方もあれば、別れや環境の変化に一抹の寂しさを覚える方もおられるでしょう。

仏教では、彼岸へ至る実践として「六波羅蜜（ろくはらみつ）」を説きます。布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧。この六つの徳目は、特別な修行僧だけのものではなく、日々の暮らしの中で育まれる心の在り方です。

えながら息づいています。田畑に新しい命が芽吹き、子どもたちの声が通学路に戻り、地域の行事も動き始めます。その営みの一つひとつが、私たちの暮らしを支えています。

まもなく春彼岸を迎えます。

「彼岸」とは、迷いの多い此岸（しがん）から、悟りの彼岸へと至ることを意味します。春分の日を中日として、昼と夜の長さが等しくなるこの時期は、偏りのない象徴とされてきました。

布施・思いやりを分かち合う。持戒・自らを律する。忍辱・怒りに飲み込まれない。精進・怠らず歩み続ける。禅定・心を静める。智慧・物事を正しく見る。これらは決して難しい理論ではありません。家族にかけける一言、地域での挨拶、仕事に向き合う姿勢。その積み重ねが、彼岸へと向かう歩みです。日蓮聖人は『立正安国論』において、「国土乱れん

時は、先ず仏法乱る」と記されました。社会が不安定になると、その根底には人の心の揺らぎがある、と読み取ることができます。だからこそ日蓮聖人は、外側の変革ではなく、内なる法華経の実践を説かれました。

また『報恩抄』には、「いかにいはんや父母の恩をや」とあり、恩を知る心の大切さを説かれています。

春彼岸に墓前に立つことは、その恩を思い起こす行いです。私たちがここにいてるのは、ご先祖の歩みがあったからこそ。家庭を守り、地域を支えてきた多くの方々のご苦労の上に、今があります。青年世代の皆さんにとっては、忙しさの中で彼岸がただの祝日のように感じられることもあるかもしれません。しかし、ほんの数分でも手を合わせる時間を持つことは、自分の命の根を確かめることでもあります。

『観心本尊抄』には、「南無妙法蓮華経は師子吼のごとし」

とあります。師子吼とは、獅子のひと吠え。迷いを打ち破る力強さの象徴です。御題目は、大声で叫ぶためのものではありませんが、心の奥に響く確かな響きがあります。

桜は、誰かと競うことなく咲きます。そして静かに散ります。しかしその散り際は、次の命への準備でもあります。生と死は断絶ではなく、大きな流れの中につながっています。

春彼岸は、亡き人を偲ぶと同時に、生きている私たちがどう歩むかを見つめ直す期間です。六波羅蜜の一つでも意識してみる。感謝の言葉を口にしてみる。その小さな実践が、此岸を彼岸へと近づけます。

どうかこの春、穏やかな陽光のもとで、ご先祖への感謝とともに、ご自身の歩みを見つめる時間をお持ちください。